国内におけるグローバルな社会運動の展開とその可能性

－グローバルな社会運動の現在と社会学－

佐藤　直樹

大阪大学（兼愛知みずほ大学非常勤講師）

0. グローバルな社会運動[1]の第２段階へ

グローバルな社会運動というと、シアトルでのWTO に対する対抗運動、サパティスタの闘争といったいくつかの成功した運動が、特定の地域で特定の形態をとった運動体として認識されている一方で、多様な形態と多様な抗議行動を行う「多事の抗議（eventful protest）」（della porta 2008）として、現在ではより多くのグローバルイベントや国際的諸機関がターゲットになっていき、運動体間の多様性や分離・共同が錯綜しながら、運動の新しい傾向が生まれつつある。

そうした動向をふまえ、タローは、グローバルな社会運動の第２段階というべき、次の３点を研究課題として挙げている。①グローバルな社会運動が生み出す変化、②グローバルな社会運動の国内の運動への影響、③国際的争議と国内政治との混交について（Tarrow 2005a:12）である。②を中心に、グローバルな社会運動によって国際的に制度的・文化的変化が起こるのか（①）、そして、国内政治への影響を与えていくのか（②）、ということが課題となる。本稿は、その序論である。

本稿では、タローの『新しいトランスナショナルアクティヴィズム』をレビューし、グローバルな社会運動の国内での展開の分析枠組みを示しつつ（１節）、グローバルな社会運動の現在的課題としての二重性に内包される、その可能性について言及していきたい（２節）。

[1] グローバルな社会運動の定義とは、本稿の場合、運動が独立して発生しているということではなく、またグローバリゼーションといった経済的な潮流に対する抵抗ということでだけでもなく、グローバル化の進展とともに変化している様々な外部環境の諸要素（国際諸制度・諸機関、国家、地域、政治、メディアなど）との関連から成立しているものであると捉えるものである。

1. グローバルな社会運動の現在と社会学－政治的機会構造派[2]の展開から

１－１　トランスナショナルな集合行為への着目－国際政治学から社会学的視点への転換

[2] ここでいう、政治的機会構造派とは、ティリー・タローらによる次のような展開を想定している。ティリーによる社会運動論に対する独自の貢献は『政治変動論』（Tilly 1978）にみられ、それについて、タローは、政治的機会構造論として位置づけていく流れのなかで理解している。タローによれば、「（政治的機会構造という概念の発想は）1978 年の古典的著作である『政治変動論』においてチャールズ・ティリーが築いた」（Tarrow 1998=2006:46）。ティリーは運動を政治体とみなす「政治体モデル（political body model）」によって、集合行動論の展開においては非合理的とみなされていた社会運動が合理的行為の一環であることが示され、運動と国家は同様に政治的資源を活用する存在とみなされることになった（Tilly 1978）。「ナショナルな社会運動の発達は、統合された国民国家の台頭に付随するものであり、それと相互依存関係にある（Tilly 1984, cf. Tarrow 1998=2006:46）。より語調を強めれば、「要するに、運動は政治との関係においてのみ研究されなければならないし、運動の戦略、構造、成功のしかたは、運動が行われる国家の種類によって異なるということだ」（Tarrow 1998=2006:46）。

こうした強調によって、ときにティリー、タローが社会運動をそれとしてみなす「争議の政治」は、「政治制度レベル」を分析する議論として認識され、アラン・トゥレーヌらの議論が「文化モデル」を重視するものとは別の潮流をなすものとして理解されている（cf. 濱西 2008）。本稿では、こうした認識による彼らの議論の位置を、政治的機会構造『派』と呼びたいのであるが、その意味内容は、運動がナショナルな国家諸制度との関係性のなかで発生・盛衰することにもっとも分析の重点を置くということである。

タローは、新自由主義と結び付けられるグローバリゼーションよりも、インターナショナリズム、特に機会構造としてのインターナショナリズムという側面を強調している。

タローによれば(Tarrow 2005a:21-22)、国際政治学における先行研究の代表的な３学派、すなわち、

１）ネオリアリズム：国家は国際政治においても継続的に主たるプレイヤーであり、諸国家は、国家間の非対称的な力関係に埋め込まれた国際的なシステムである。
２）構築主義：国家のもつ規範やアイデンティティがその国際的な態度に影響しているか、グローバルな、少なくともトランスナショナルな諸規範が国内外の態度を形成しているかに関心をもつ。
３）リベラルな制度学派：諸国家は国際的な実践やレジーム、諸制度を創設することで、国家内の集合行為的な諸問題を解決しようとし、他国家の態度を監視しようとしている。

以上のいずれも焦点をあてていないのは、国内の集合行為と国際的な集合行為とを媒介する過程の分析であるとする。「私は、トランスナショナルな行為者の今まで言及されてこなかった特徴、すなわち国内の集合行為と国際的な集合行為を媒介する性質を論証しようと思う」(Tarrow 2005a:25)。タローはなかでも、国際的諸制度は機会でもあるが制約でもある(Tarrow 2005a:26, cf. Keohane & Milner 1996）とする指摘に賛同し、次のような想定をしている。国際的諸制度・諸機関はグローバル資本主義の反対者とクレイマーが動員することができる機会を提供している(Tarrow 2005a:26) が同時に、世界中のふつうの人々にとって制約となるものであり、それらは、正当化された憤慨と抵抗の源となるものである(Tarrow 2005a:25)。

また、「『グローバリゼーションは抵抗を導き出す』というテーゼには収斂されない」(Tarrow 2005a:5)とする。それは、グローバリゼーションの影響を受けた様々な現象のうちに、グローバルな社会運動があり、かつそれらが、運動参加者だけではなく、諸国家や国際的諸制度・諸機関もアクターとしてみなす「機会構造としてのインターナショナリズム」というべきものに影響を受けているとするからである。そして、タローは、政治的機会構造派という立場を意識して、次の３つの仮説について検証しようとする(Tarrow 2005a:33-34)。

１）グローバルにイシューをフレーミングし、国際諸制度・諸機関に対抗して国内の争議を俎上に乗せることで、国際化が引き起こされるのであるが、それらは、国境を超える永久のつながりを生み出さない。
２）集合行為の特定形態が伝播し、争議のスケールがグローバルからナショナル・ローカルへ移行することで、国境を超える争議のレパートリーが統合されるが、両方のプロセスともに、一時的なものであり、真の社会運動が構築される国内の交戦状況を低下させる。
３）国内争議の外化と持続的な国際連携の形成は、国際争議と国内争議との混交が起きている強い証拠である。

以上の仮説が示しているのは、１）、２）は、グローバルな社会運動の編成が、一時的なものであり、国内における社会運動を衰えさせるというものであり、３）は、グローバルイシューが国内の争議に浸透していくとするものである。タローはこの著作では次のように結論づけている（Tarrow 2005a:219)。グローバルな社会運動は、物語的で矛盾を孕んだものであるが、ますます国内の運動に影響を与えるようになってきている。そして、トランスナショナルな行為者が国際的諸制度・諸機関を対象として、ロビー活動を行い、抗議をし、そして、グローバルーナショナル・ローカルな連携を作り上げていくとしている。しかしながら、今後その方向性がそのまま進むのか、国家との関係性がどうなるのか、国際的諸制度がどうなるのかについてはまだ途上であるとしている。

タローはこうした現状について、次のように述べている（Tarrow 2005a:204)。グローバルな社会運動について、それは、国内の争議をグローバルな傘のなかに含めてしまうのであるが、そうした結果として、国内のイシュー間の不平等が起こる。また、国際的諸制度・諸機関は、国家によっても使用されるので、運動にだけ優位に働くわけではない。そういういみで、トランスナショナルな社会運動の形成は、社会運動・国家の位置づけを変化させている一方で、国内の政治に対しては、どちらかいえば、運動が起こりにくくなるように働いている。国際的諸制度・諸機関を媒介にして、グローバルな社会運動と国家があり、国内の政治状況は、また別のものとしてあるが、(全部ではないが)国内の運動はグローバルな社会運動に動員されていくと。

タローの主たる関心は、機会構造としてのインターナショナリズムが、機会と制約として機能する中で、一時的に形成されるグローバルな社会運動が、どのようなプロセスを経て形成・維持されているかにある。

１－２　トランスナショナルな運動展開の機能分析ー機会構造としてのインターナショナリズムモデル

前項でみたように、タローは、『新しいトランスナショナルアクティヴィズム』（Tarrow 2005a）で、インターナショナリズムの概念を展開し、トランスナショナルな争議（Contention）に関する独自のモデル構築を試みている。タローは、グローバル化が重要な変化をもたらしたものであるとしつつも、それが争議の直接的な原因ではないとし、「機会構造としてのインターナショナリズム」（Tarrow 2005a:7）という概念を提案している。

まず、タローは、グローバリゼーションという言葉の定義の狭さを指摘する。グローバリゼーション＝抵抗の原因という図式をとる立場においては言葉の内容が狭くなってしまう。その場合、インターネットの発達、海外旅行の増加、英語使用の拡大、近代の広がりとして捉えられ、それらグローバリゼーションが、グローバルな社会運動が出現する原因であるとされる（cf.Meyer, Boli and Thomas 1987）。機会構造としてのインターナショナリズムという視点においては、こうした主張ではなく、グローバリゼーションの定義変更、すなわち「グローバリゼーションのより広い定義（＝グローバル化）、それは、資本、商品、情報、アイデア、強制力の厚みとスピードが増加することを意味し、それらは、諸国家の行為者を結びつけるのである」（Tarrow 2005a:5、カッコ内は筆者による補足）とする。その上で、グローバル化の重要な変化として、次の４点を挙げている（Tarrow 2005a:6）。

１）経済的なネオリベラリズムの悪影響により IMF、世界銀行、WTO が抵抗の標的となってきたこと
２）Peaple’s Global Action や ATTAC などのグローバルに行動するネットワーク型の運動組織が成長してきたこと
３）新しい電子技術とそれへのアクセスの増大が組織化を容易にしていること
４）カウンターサミットと大企業へのボイコットがレパートリーに加わってきたこと

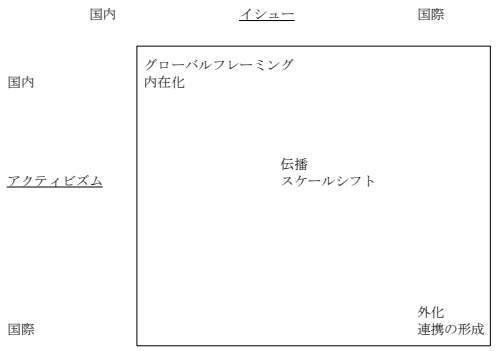
以上の４つの主要な変化は、グローバリゼーションといったひとつの現象に起因しているというよりも、その現象の広がりも含めて、行為者とさまざまな要素が結びつき、運動を形成しているということの現われであると、とらえられる。

すなわち、こうしたグローバル化に影響された変化は、その機会と制約のうちで形成されるものである。タローにとって、グローバル化は運動の形成を容易にしたわけではなく、運動にとって障害も与えているのであり、いわく「トランスナショナルな社会運動の形成は容易ではない。めったに会わずに、具体的な信頼関係を欠いた人々が国境を超えた集合的行為を持続させるのは、困難である。他方で、争議のレパートリーは、ローカルでナショナルな文脈から成長し、かつその文脈に預けられているのである」（Tarrow 2005a:7）といい、グローバルな運動とローカルな運動の連携を研究課題とし、その連携に至るまでの諸段階を概念化しようとする。

タローは、次のように、国際的諸制度・諸機関、国家、行為者の関係を定義している(Tarrow 2005a:8)。

１）ますます濃くなっていく諸国家、行政諸機関、国家によらない行為者にまたがる諸関係
２）国際・国家・サブナショナルレベルの垂直的な関係の増加
３）国家によらない行為者、国内の行為者、国際的な行為者のネットワークの形成を促進している、公式・非公式の構造の増加によって、トランスナショナルなアクティビズムが誘発される。

そして、次のような概念の図式化を行い、段階的にトランスナショナルに運動が形成されいく様子にアプローチしようとする。



タローの基本想定（Tarrow 2005a:33）

以上の図が示しているのは、ローカルなプロセスとしての、グローバルフレーミング・内在化を、トランスナショナルなプロセスとしての、伝播・スケールシフトを、グローバルなプロセスとしての、外化・国際的連携の形成である。タローは、このような図式が仮説作業であり、さまざまなケースを解釈する基礎概念のセットだとしている（Tarrow 2005a:32-34）。

次項では、グローバルな社会運動の新しさについて述べ、今後の研究課題に言及していきたい。

１－３　グローバルな社会運動の新しさ－国内政治への影響をめぐって

タローは、グローバルな社会運動の新しさについて次の３点を挙げている。１）新しい態度、２）新しい組織形態、３）キャンペーンの移行と組織の構成

３点の実際は、国内への展開において、国内の「障害」に直面する。それらは、次のように簡潔に示すことができる（cf. Tarrow 2005a,b）。

１）新しい態度の国内の行為者による一様ではない受容
２）新しい組織形態を形成する際に資源を得るために払わなければならない様々なコスト
３）キャンペーンを展開する際に国内の機会を利用するための好機を得るための資源の確保

以上のような、「障害」は、国内の運動においてどのように問題化し、乗り越えられている（あるいはいない）のだろうか、そして、それらを分析する社会運動論の枠組みとは何だろうか、これらが今後の問いである。

次節では、上記の1)と関係するグローバルな社会運動の二重性をめぐって著されたタローの論文(2005b)を参照し、グローバルな社会運動の現在的課題としての二重性が内包する可能性について言及していきたい。

2. グローバルな社会運動と国家－トランスナショナルアクティヴィズムの社会学

グローバルな社会運動の現在的課題として、グローバルな社会運動の二重性という課題を挙げることができる。それは、グループの志向性、および行動の分類が、運動体の分離の原因であるとみなすことを指している。こうした分離がなぜ起こり、そして、どのような未来が望ましいのかについて、いくつかの回答がありうるが、ここでは、グループの類型化を試み、そして、そのうえで、それらが国家の対応にどのように影響しているかについてみていきたい。

グローバルな社会運動に２つの運動があるという認識について、たとえば、以下のような整理がある。

	NGOアドボカシーネットワーク	直接行動
範疇	政策－イシュー－アドボカシー	多様な社会正義のアジェンダ
組織形態	NGO中心のイシューネットワーク	大衆行動－マルチイシュー
規模	斡旋的な連携による限界	技術的ネットワークによる拡大
ターゲット	政府、企業	企業、G8・G20・COP、WEF、IMF、WTO
戦略	戦略的キャンペーン	恒常的なキャンペーン

（Bennet 2005 に加筆・修正して作成）

表が示しているのは、政策提言を志向する NGO アドボカシーネットワーク（以下、NGO グループと表記）と、多様な社会正義のアジェンダを掲げ、オルタタティブな世界を志向する直接行動（Direct Action）のグループの２つの分類である。この図はさらに現実の変容に合わせて変化・修正を要する箇所もあるが、現実を反映している。たとえば、NGO グループは、政府（government）をターゲットにする一方で、直接行動のグループは、G8 といった先進諸国の連合体をターゲットにしている。こうした相違は、G8 サミットの存在の是非に関わることがあり、グループの分離にもつながりうる 。

こうした分離という見方は、次のような議論の土壌になっている。諸国家の存在を前提としない議論がある。代表的な論者のひとり、デヴィッド・グレーバーは、直接行動に訴えるグループの方針が、「直接民主主義」であり、暴力的な手段も含めた多様な戦術を容認することが重要であるとしている。そして、「多くの NGO の人たちは直接行動的な戦術をますます不愉快に思うように」（グレーバー 2009:28）なっていくこととともに、直接行動のグループは、政策提言型の行動を優先するグループと袂を分かち、「人びとはそれぞれ自分自身の行動を決定すべきだが、それでも（自分が容認しえない）異なった選択をする人びととの連帯を保持せねばならない、という倫理」に帰着したという（グレーバー 2009:28）。こうした極論的な運動の方向性は「新しいアナーキズム」（Graever 2002、グレーバー 2009）という理念のもとで、運動の一翼を形成しつつある。

本稿では、こうした議論の積極的な部分は共有し、ここでは、運動の現在的課題をより明確にするために、国家との関係に議論を進めていきたい。

タローは、グローバルな社会運動の二重性（duality）について、「ふたつの異なる活動家たちの連携か、新し

い世界をともに！か」というテーマで論及している（Tarrow 2005b）。この考察の中で、グローバルな社会運動の国内への展開について扱い、その条件としての国内の構造について検討している。グローバルな社会運動が国内へ展開していく場合に、国家の対応には次の２つがあるとしている（Tarrow 2005b:63-65）。

１）証明（certification）：行為者の正当性や行動、主張の国家による承認を指している。

２）抗議の警備（protest policing）：ネガティブな国家の対応を示しており、デモを警備する、入国制限を行うなどの警察権力の行使を指している。

以上の２つの見方は、グローバルな社会運動の進展とともに重要性を増すと考えられるが、抗議の警備が近年ますます「過剰」になりつつあることが大きな課題となっている。それは、運動にとって課題であるというだけでなく、市民に対する国家権力のパワーバランスという課題でもある。

タローは、そうした背景認識のもとに、２つの運動が連帯していくことを展望し、そのひとつの方向性として、「領域を再構築する」（Ansell & Palma (ed.)2004）ことをあげる（Tarrow 2005b:66-67）。

グローバルな社会運動によって「グローバルなもの」が現出すると同時に、抗議の警備にみられるように、国内において運動をめぐる環境が平和な状況から暴力的な政治実践にさらされてしまうと考えると、グローバルな社会運動対国家という図式を固定化してしまうことになりかねない。そこで、タローは、国家のなかの飛び地や連携、機会を探すことを提案する（Tarrow 2005b:66）。それが、「領域を再構築する」という考え方である。その内実は、グローバル化の進行を背景として起こっていると考えられる諸現象が、文化的・経済的・政治的関心やアイデンティティに対する「外部」の選択肢を増加させているという現象を指している（Tarrow 2005b:66）。たとえば、運動体の活動によって交渉の基準が国家レベルからヨーロッパレベルへ移行する。そのような移行によって、運動体は、国家が国内の事象に対して権威を持って秩序づけていくという、そうした権威と能力をもっていることに対して、挑戦しているのである（Tarrow 2005b:66）。

タローはこうした見方を進め、交渉の基準を移行させることでいままでにない交渉の場を設けるという内容の１）領域的な脱出（territorial exit）、さらに、その交渉の場において、新しい機会が再編成されるという内容の２）領域的な政治的交換（territorial political exchange）という概念を提案している。こうした、国家内領域の脱領域化－それがグローバルな市民社会といった理念型とどのような関連にあるかは、別の課題としてあるが－、そこに、グローバルな社会運動の国内での展開における可能性があるのではないだろうか。そして、その可能性を社会学的に分析すること、これが、新しいトランスナショナルアクティヴィズムの社会学の課題である。

【参考文献】

Ansel, C. & Palm, G. (eds.) 2004 *Restructuring Territoriality: Europe and the United States Compared*, Cambrige University Press

Bennet, L. 2005 “Social Movement beyond Borders: Understanding Two Eras of Transnational Activists. “ in della Porta, D. & Tarrow, S. (eds.)2005 *Transnational Protest and Global Activism*, Rowman and Littlefield

della Porta, D. 2008 “Eventful Protest, Global Conflict”, Distinktion No.17, pp.27-56

Graeber, D. 2002 “The New Anarchists.”New Left Review 13, pp.61-73

デヴィッド・グレーバー（高祖岩三郎訳・構成） 2009『資本主義後の世界のために 新しいアナーキズムの視座』以文社

濱西栄司 2008「動員論と行為論、及び第３のアプローチ－方法論的差異と社会運動の「質」」『ソシオロジ』163:39-54

Keahane, R. & Milner, H.(eds.) 1996 *Internationalization and Domestic Politics*, Cambrige University Press

Meyer, J., Boli, J. & Thomas, G. 1987 ” Ontology and Rationalization in the Western Cultural Account.” in Thomas, G., Meyer, J., Ramirez, F. & Boli, J.(eds.) 1987 *Institutional Structure: Constitutionig State, Society, and the Individual,* Sage Pubications

Tarrow, S. 1998 *Power in Movement:Socioal Movement and Contentious Politics 2nd* , Cambrige University Press(＝大畑ほか訳『社会運動の力』彩流社、2006)

2005a *The New Transnational Activism*, Cambridge University Press

2005b “Two dualities of Transnational Contention:”Two Activist Solitudes” or A New World altogether?”, Mobilization vol.10(1), pp.53-72

Tilly, C. 1978 *From Mobilization to Revolution* ,
Reading, Addison-Wesley.
1984 *Big Structures, Large Processes, Huge Comparisons* ,
Russell Sage Foundation